

北政巳先生の学徳を寿ぐ

川 勝 平 太*

北先生は現代の宮本武蔵です。早や30年ほど前のことですが、技術史の権威・中岡哲郎先生主宰の「西洋から日本への技術移転」をテーマとする研究会で、北先生はスコットランドが明治日本に果たした役割について報告をされました。そのとき北先生は右手と左手にマジック・ペンをもって、行を変えるごとに、右手→左手→右手……と流れるように交互に手を変えながら、しかも同じ字体で！白板上に重要事項をサーッと書いていく、その妙技に度肝を抜かれました。宮本武蔵は剣の二刀流の達人でしたが、北先生はペンの両手使いの達人です。

北先生の学問の真骨頂は、何といても、イングランドに偏しがちなイギリス像を正してスコットランドの存在を飛躍的に高められたことです。また、明治日本の産業技術の発展と国際化にスコットランドの影響力が多大であったこと、大英帝国の経済的基礎にはスコットランド人の技術、ディアスポラ（海外移住）、グローバルな活躍があったことなどを実証的に明らかにされました。北先生の学界への多大な貢献です。

小生は早稲田大学で日本経済史を正田健一郎先生、イギリス経済史を小松芳喬先生に学びましたが、大学院生の頃から、父のように、その学風を慕っていた先生がいました。イギリス経済史の角山栄先生です。和歌山大学学長を務められた碩学・角山先生の愛弟子が北先生でした。敬愛する角山先生を通じて、北先生の高い学問と素晴らしい人柄を知りました。

北先生は、創価大学の学生さんに、小生の訳したノエル・ペリン『鉄砲を捨てた日本人』（中公文庫）を、ご親切にも、紹介してくださっていました。それを知ったのは創価大学の卒業生の方からでした。北先生は、ご専門のほか、創価大学の国際交流や学生スポーツの振興に多大の貢献をされましたが、一人の人間としても平和を心から願い、後進に平和への道を説き、また自ら実践されてきた学徳の高い人格者です。

北先生はイギリスでは「サミー」の愛称で、誰もが先生の明るく正直な人柄に信愛の情をこめて接しているのを何度も目の当たりにしました。北先生は良き国際人の手本です。北先生はスコットランドのグラスゴー大学でチェックランド先生に師事されました。小生はイングランドのオックスフォード大学でマサイアス先生に師事しました。チェックランド先生とマサイアス先生はともにイギリス経済史学会の会長を務めた碩学同士で、仲が良く、北先生と小生はそれぞれの日本人弟子として薫陶を受け、お互いに海外で顔を合わせることも多く、いつしか肝胆相照らす学友になりました。チェックランド先生が亡くなられた後も、学者肌のチェックランド夫人から

* 静岡県知事（経済史家）、元静岡文化芸術大学学長

小生も家内もご指導をいただき、夫人の書かれた『イザベラバード 旅の生涯』（日本経済評論社）を家内が翻訳しており、天に召された夫人を偲ぶよすがとなっています。

角山先生も鬼籍に入られましたが、先生は、日本の学問の国際貢献に心を砕かれ、後進を導かれました。その衣鉢を継ぐ志は北先生と小生に共通しています。小生が早稲田大学から京都の国際日本文化研究センターに移ってからは、内外の学者からなる共同研究における小生のパートナーが北先生でした。一緒に本にした成果として、

Intra-Asian Trade and the World Market, Abingdon and New York, Routledge, 2006.

Intra-Asian Trade and Industrialization, Abingdon and New York, Routledge, 2014.

などがあります。最近では、小生の恩師マサイアス先生が逝去されて、追悼論文集を編むことになり、北先生に寄稿を依頼したところ、ご快諾いただき、今年（2018年）春に

Asia and the History of International Economy, essays in memory of Peter Mathias, with special contributions from H.I.H. Crown Prince Naruhito, Abingdon and New York, Routledge, 2018.

がイギリスとアメリカで公刊されました。その中で、北先生は、19世紀のアジア海域の商業圏をめぐって、イギリスを中心に新興のアメリカや各国が凌ぎを削る中、大英帝国の優位が失われなかったのはスコットランドの船舶技術・現地経験・人的ネットワークの支えがあったからだ、という北先生の面目躍如たる好論文を執筆されています。この追悼論文集は、マサイアス先生の指導を仰がれた徳仁皇太子殿下のテムズ河の水運とグローバルな水問題にかかわる二本の論文を収めており、皇室が学問を重んじられていることを内外に知らしめる学術書です。そこに小生も一文を寄稿し、北先生と名誉を共有することができました。北先生の学友であり続けてきたことは小生の学問人生における誇りです。